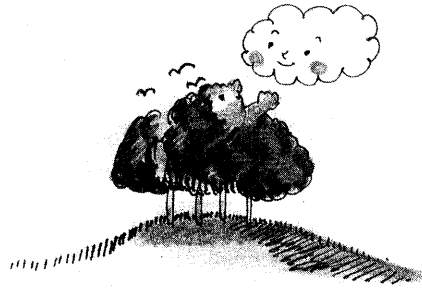


小さな保育史

たえる保育をすることによって、製作による表現はなくとも、子どもの顔は輝やき、それぞれなりに健全に成長するだろう。社会の状況が変化すると、保育者はそれまでに自分が経験しなかった新たな事態に直面し、子どもが生きている世界を新たな眼で考え直さねばならなくなる。このことはどの時代の保育者にも共通のことであろう。

(愛育養護学校)

村山 英子



小さな保育史——それは、言い換えれば、昭和三十一年四月から今日までの、私がかかわった保育の歴史である。しかし、単に私ひとりの保育であるにとどまらない。おそらく今もそうであるように、当時の幼稚園のあ

り方は、さまざまであったと思われるが、私の保育もまた、時代の流れの中であり、当園の歴史の中にある。ほんの小さな一コマに過ぎないが、確実に存在した歴史の断片である。

私が保育者となって、まず、「大切なこと」として植えつけられたのは、子どもの「自発性」と「創造性」を育てることだったように思う。しかし、事改めて誰かに言われたという記憶はない。周囲のことから感じとったものである。「自由遊び」と呼ばれた子どもの自由な遊びの時間は、「課業の合間の遊び時間」ではなく、子どもが「自発性」を発揮する場として、大切に考えられていたようである。

しかし一方では、保育者の計画による活動も、保育の中で重要な部分を占め、その計画に、いかに子どもを自発的に向かわせるか、その活動の中で、いかに創造性を伸ばすかに、保育者の技術が問われていたように思われる。

昭和三十年代の初め頃のことを思い出してみると、まず浮かぶのは、週二回の音楽リズムの時間のことである。遊戯室と呼ばれるホールを使用できるのは、一日二クラスで、六クラスある当園では、一クラスが一週に二回ずつ使えることになる。その日は、時間になると、保

育者の示唆で、「○○の組、おあつまり」、「○○の組、おゆうぎ」と節をつけて、子ども同士が声をかけ合い、集まって、一列に並んで遊戯室に行く。そして、三、四十分、あるいはそれ以上の時間を、組全体が一緒に活動する。活動の内容は多様であって、歩く、走る、跳ぶ、の基本動作と、それに変化をつけたものや、動植物や乗り物などの表現、曲や歌に合わせた動き、簡単なストーリーのある自由表現などである。

ストーリーのある自由表現というのは、例えば、春になって、お花が沢山咲きました。風がそよそよ吹いて、お花がゆれていますね。お隣のお花と、「こんにちわ」とご挨拶をしているお花もありますね。きれいなお花が咲いたので、ちょうちょうさんも飛んできましたよ。「蜜をくださいな」と言っているちょうちょうさんもいますね。仲よしになって、一緒に、みんなで踊りましょう。……などというような筋で、ピアノを弾き、それに合わせて、子どもたちが、花になったり、ちょうちんになったりして、いろいろな表現をする。子どもが考え、

工夫した表現は、とりあげてはめてあげる。テーマは、折々の工夫で、“遠足”であったり、“海のおそび”であったり、いろいろである。

新しい歌や、楽器の指導なども、“お集まり”の呼び声で、クラス全員が保育室に集まった。それぞれの活動の中では、子どもの自発性や、考え、工夫が大切にされて、楽器の打ち方なども、子どもの発想をとりあげたりしたが、いつ、どのような活動を入れるかは保育者の計画によった。

絵画製作に関する活動は、あまり、全員一斉に始めることはなく、用意された教材を、やりたい子どもから始め、時間の幅をもたせながらも、結果としては、皆が経験するという形をとっていた。しかし、時には、遠足や運動会などの生活経験を絵に表現するというような活動を課題としたり、皆の絵を集めて、紙芝居のようにして見せるなど試みた記憶もある。

月曜日には、日曜日に経験したことを皆の前で話す“生活発表”と呼ばれる活動もあった。いろいろな活動

を、バランスを考えながら、盛り込んだように思う。

また、いろいろな領域にまたがった、総合的な活動もあった。子どもの生活に密着した活動が先にあり、抽出すると、いろいろな領域の“ねらい”となる、という方が適切かもしれないと思う。これは、何週間も、あるいは月を単位に考えるような大きな活動で、テーマもいろいろであった。“動物園”“お店やさん”“おもちゃや”“つり堀”“お祭り”“遊園地”など、その活動の盛り上がりは、保育者にとっても大いにやりがいのある、興味深いものであった。

見よう見まねで、先輩の保育から学びとることに忙しかった新米保育者の私も、その間に、いくつもの疑問を暖め始めていた。

ベテラン保育者のクラスでも、全員でする活動に、興味のないようすで、ぼんやりしていたり、全体の動きにのらずに乱す子どもがいたりする。園で過ごす時間は、一人ひとりの子どもにとって、かけがえのない生活のひとコマではないか。それぞれの子どもに、その時間を返し

てあげて、その子どもにとって、より生き生きと生きられる時間にしてあげた方がよいのではないか。まして、全体を乱す子どもへの言いかけや叱責は、子どもの発達の時期によっては、全体への活動に参加させるプラスの面とは別な、マイナスの影響を生じているのではないか。なぜ、全員が一斉に、その活動に参加しなければならぬのだろうか。等々、疑問をもった。

私の疑問が次第に強まってきた頃、先輩の一人が、新しい方向をとり始めた。昭和五十年前後だったと思う。週二回の遊戯室での音楽リズムの活動をやめ、毎月の誕生会のための、お菓子入れ作りをやめた。又、昼食のあとの、全園児が揃ってする体操もやめた。

この新しい方向は、必ずしも、各組の担任に、すんなりと受け入れられたわけではなかったが、時間をかけながら、園全体に浸透し、定着していった。

現在の保育は、一人ひとりの子どもの発達に合わせ、一人ひとりの子どもの活動を大切に作る方向へと、より進んできたと思われる。朝登園してきた子どもたち

は、遊戯室にとんでいって、大積木で、おとも驚くような大きなものを作ることに熱中したり、自分たちが作ったお花や、アクセサリーのお店を出して売り買い遊びをしたり、劇あそびをして、小さい組の人たちをお客さまに誘ったり、いろいろな遊びを展開する。

クラス全員が参加する活動のような、外側からみての盛り上がりや、みごとさはないが、子どもの内側から湧き出た興味の、生き生きしさが、そこにはある。理論が先に立つのではなく、子どもの姿を見つめるところから新しい保育の流れが作られてきたように、外側から眺めた大人の自己満足ではなく、子どもにとっての生活の意味を考えると、保育を考えていきたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)